

ROTARY CLUB OF

**KANAZAWA-NORTH**



**金沢北ロータリークラブ**

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：小杉善二 幹事：塩村喜代次

情報委員長：米沢修一

1979・10月18日 第151号

**“ザ・カナザワ”**

清水 忠君

“地方の時代”は、地方の都市が自立の構造を確立することから始まります。

そして、郷土の産業、伝統文化、市民生活など、その地方の特性を明確に打ち出すことです。

今、私達はいわゆる政府の定住圏構造を軸とした“第三次全国総合開発”の計画をのりこえて郷土金沢のイメージと具体的な行動方針を考えてゆきたいと思います。

市制90年の歴史は、“百万石城下町”から“文化都市金沢”への継承と発展の軌跡でありました。



また、その間の日本は紆余曲折を経ながらも先進国の仲間入りを果たす一方、国内的には、中央集中型の国土をつくってまいりました。

このような背景のもとで、一地方として、十分な力をつけると同時に、金沢らしさを打出し、自立していく姿勢を積極的に考え、方向付けをしなければなりません。

そこで金沢市民のコンセンサスを得るために、私達はまず、経済界、知識人、文化人、市民団体などが一同に会し、“わが街”の明日を語る機会を提案したいと思います。

—金沢北RC例会講話から— (文責 米沢修一)



文化財拝見

**⑥ 仁王尊**

全性寺

通称、赤門寺。宝生流家元宝生紫雪、能役者、波吉宮門らの墓があるこの寺門、山門金剛閣に熱り立つ仁王像が安置されている。

脚気をはじめ外脚部の病気を祈念するに霊験あらたかだて世人信仰したと伝う。

しかしその由来は定かではない。





故 水 野 博 会 員

## 弔 辞

金沢北ロータリークラブを代表して水野さんにお別れの言葉を申し上げます。

今日は期しくも私達金沢北ロータリークラブ六周年の誕生日、此の日が貴方とお別れの日となりました。

50年12月ご入会以来4ヶ年貴方はロータリアンとして優等生でした。例会、その他クラブ行事にも百パーセント出席されました。京都洛北ロータリークラブ友好締結の記念品、その他多くの貴方の作品をいただいております。ありがとうございました。

MROでの個展は貴方の願望としておひらきになったとおききしておりました。その時は大変元気におみうけしましたが、それ以来病床につかれ、お見舞にまいりましたときもお元気で話題もつきず会員一同でお贈りした金もく、銀もくにお喜びになり、病氣中は賜暇休暇を希望せられました。私は涙をおさえ胸のつまる思いでした。

真のロータリアン、ロータリー精神を貴方から教えられました。

水野さん安らかにおねむり下さい。

昭和54年10月4日

会長 小 杉 善 二

## 水野博君を想う

大 場 松 魚

水野博君、61才、昭和54年10月1日午後9時不帰の人となる。

彼の病篤しと聞いたのは、6月末石亭での新旧役員懇親会の席上であった。その日は異状なくらい顔色が勝れず、いつもの彼とは別人の様であった。その時も病名を語らずいやな病気でというのみで、疲れ果てたという事がうかがえ、その声もか細かった。又言葉のはしばしに観念し、達観している様にも感ぜられた。それから数日後の7月初旬MROホールで、加賀友禅作家水野博個展が開かれた。会場には過去10数回に及ぶ日本伝統工芸展入選作が飾られ、彼の10数年の歩みが一望に眺められた。あわせて近作の訪問着、帯、額等が展示されていた。静かなふんいきの中に日本美の根元ともいえる「みやび」がひしひしと感ぜられ誠に立派な個展であった。彼の案内で会場を一巡してから抹茶を頂いた折、彼は静かに、これで製作をやめようと思う、筆を折りますと覚悟の程を打ち明けられた。やるだけやったと淋しい笑までうかべて語った。疲れた、休ませてもらうと静かに別室へ去ったのであった。個展にかけた彼の熱意は大きく、病身にむち打っての製作、死を感じながら5年の永きにわたる肺ガンを人にも打ち明けず戦い続け、最後の総力を振り絞っての精進努

力、45年にわたる一途な一加賀友禅作家の芸道の仕上げをやったものと思われるのである。

京都の師土屋素秋先生の膝下での十年もの修業を経て昭和19年帰郷独立した。それから35年間、彼は長い修業時代の辛苦と鍛え上げた基礎技術をふまえ、更に心豊かに不届の努力を積み重ねた。来る日も来る日も臙脂、紫、藍、黄、緑の加賀友禅の五彩を中心に女性をより美しくと日夜画き続け、思考し続けて製作に励んだ事だろう。古典的な作品では彼が今や加賀友禅界では第一人者だと小川甚次郎氏がひそかに私に語りかけた事もあったのである。人間国宝木村雨山先生なきあと加賀友禅の担い手として彼の存在は大きかった。昭和52年伝統工芸士、昨年は石川県無形文化財加賀友禅技術保存会会員に推挙され、技術の保存、発展、後継者養成等にかかる世の期待は大きいものがあつた。又芸域を広め、格調高い芸境に到達し加賀友禅の伝統を守り、発展せしめるために長生きしてほしいかと思うのである。

華麗、優雅、繊細、巧ち、端正、そして大胆、格調高い彼の作品に今では見る事も、語りかける事も出来なくなった。

来年初頭京都のフジアート出版社から水野博作品集が出されると聞く、彼はその喜びを味う事なく旅立ってしまった。

## すべてを开花して

— 水野さんを憶う —

柴田 三郎

すべてを見事に开花して、われらの水野博さんは他界された。

去る7月3～4の両日に亘つて、MRO大ホールにて、水野さんの豪華絢爛、百花撩乱の個展が開かれた。テーマは“伝統的そして現代美……きのうときょう、あした”である。加賀友禅の古典美と新鮮な近代美のコントラストに、水野さんの雄渾、そして華麗な筆致が駆使されて、まさに作家、水野博45年の集大成の観があつた。

水野さんは畢生の精魂を傾け尽して世に問う個展だったのであろう。果然、大成功であり、後世に遺さるべき名作揃りであった。が、水野さんはその歡喜と安堵に、一挙に疲れが吹き出たのであろうか。個展を終った次のクラブ例会に出席、挨拶されたのが最後となった。



金沢北RCでは、いつ早く水野さんの偉業を讃える催しを計画したのだったが、謙虚に固辞され「それでは記念に、私の好きな樹、金木犀を……」と所望された。クラブでは早速、別に銀木犀を加え一対として贈った。水野さんは、クラブのこの思いやりを大変喜ばれたようである。

奇しくも個展から丁度3ヵ月目、もくせいの花薫る満開を見届けるが如く、その薫香に包まれての大往生である。しかも、その告別式は10月4日、盟友の集う金沢北RCの6周年記念例会の当日であった。

例会は冒頭、水野さんのご冥福を念じて、心からなる祈りを捧げたのは、もちろんである。

# LET SERVICE LIGHT THE WAY

私は、その後、水野夫人を訪ね、今は“智徳院釈普照”の靈に額づき、夫人と、しばし対談した。「主人は勤勉で、仕事一筋に身も心も傾け続けましたが、個展が終ると、このへんで一服させてもらおう……と、粒々45年の画筆を置きました。深い思いやりの夫、尊敬された父、やさしさと情熱の師匠でした……」と。水野さんご夫妻は、良き二女一男に恵まれ、嫁がれたが、この道の才能に富む長女の陽子さんが、父君の遺業を継がれるらしい。長男高春さんは京都大学工学部の出身で、渋谷工業に昨春入社 of 俊才で、水野さんは家庭的にもお幸せであった。

水野さんは昭和50年12月のロータリー入会であるが、翌1月22日発行の57号会報“私の名刺”の中で、「友禅の仕事に美を求め生甲斐を感じて居る私であります。作る、書く、壊すは人間の本能的なものだと思います。が幸い、画く事の好きな私は此の道に入り色々の経験も致し、美しいものの何かを教わり、思い出多い仕事も致して来ました。私は色を作る者であり、また色を語るものでありたいと願って居ります……中略……色の配列には表情があり、感情があり、また音楽の如き旋律があり、安堵があります……」と。

「水野さんの生涯は60年余、まだまだ長らえて欲しい人でしたが、その充実した人生、そして不滅の足蹟を残されましたね」との私の述懐に、「主人は好きな道に没頭できたので……」と、哀愁の中にも、キリッと即座に応えられたので、「水野さんの一生には、この奥さんの力が偉大であったなァ」と、肅然たる思いを禁じ得なかった。(10月12日記)

## 9 月 例 会 出 席 状 況

出席率 95.91%

会員名	月日	9/6	9/13	9/20	9/27	9月	会員名	月日	9/6	9/13	9/20	9/27	9月
浅田 豊久		○	M	M	M	◎	大村 精二		○	○	○	○	◎
浅野 弘明		○	M	M	○	◎	岡部 三郎		M	M	欠	欠	×
出島 敬識		M	M	○	○	◎	岡田 林太郎		M	○	○	○	◎
二木 正樹		○	○	○	○	◎	桜井 健太郎		M	M	○	M	◎
橋場 幸一		○	M	○	M	◎	沢田 哲夫		○	○	○	○	◎
東元 潔		M	欠	○	○	×	柴田 水三		○	○	○	○	◎
平尾 信美		○	○	○	○	◎	清下 村義		○	M	○	○	◎
本江 他美		○	○	○	○	◎	塩村 喜代次		○	○	○	○	◎
市川 則人		○	M	○	○	◎	庄田 厚郎		○	欠	欠	○	×
飯野 健志		○	○	○	○	◎	高田 全郎		○	○	○	○	◎
石川 栄治		M	M	○	○	◎	高館 他山		○	M	○	○	◎
石丸 幹次		○	○	○	○	◎	高館 倭山		○	M	M	○	◎
上間 恒次		M	○	M	欠	×	土原 一		○	○	○	○	◎
木島 光仁		○	○	○	○	◎	土原 一成		○	○	○	○	◎
木下 和吉		○	M	○	M	◎	土佃 一		○	○	○	○	◎
小林 隆二		○	M	M	○	◎	土佃 一成		○	○	○	○	◎
小間井 尚男		○	○	○	○	◎	土佃 一		○	○	○	○	◎
小越 野男		○	○	○	○	◎	土佃 一		○	○	○	○	◎
小杉 守男		○	○	○	○	◎	土佃 一		○	○	○	○	◎
小杉 善二		○	○	○	○	◎	土佃 一		○	○	○	○	◎
小増 江泰		○	M	M	○	◎	土佃 一		○	○	○	M	◎
水野 博		M	M	M	M	◎	土佃 一		M	○	○	○	×
本岡 三千		○	○	○	○	◎	土佃 一		○	M	欠	欠	×
宗田 市太郎		M	○	M	○	◎	土佃 一		○	M	○	M	◎
中村 三		M	M	○	○	◎	土佃 一		○	M	○	○	◎
中村 省		○	○	○	○	◎	土佃 一		○	○	○	○	◎
大場 勝雄		○	M	○	○	◎	土佃 一		○	○	○	M	◎

## 先人に学ぶ(2)

— ロータリーの原点をたずねて —

柴田 三郎

しかし、これだけで終わりませんでした。即ち、5年後の1910年11月には、5カ条からなるロータリー最初の綱領を決定したのであります。その全文を、ここに紹介するのを省略いたしますが、この中で、私の最も注目し、重視したいのは、その第4条に、「進歩的で、尊敬すべき商取引の方法を推進すること」と、あります。まさに倫理的商業道徳の高揚であります。これが、やがて全世界の良識をゆさぶるものとなったのであります。即ち、心ある実業人がロータリーに対し、希望と憧れを燃やしたのです。果然、この年カナダに、翌1911年にはロータリーも、とうとう海を渡って英国ロンドンに創立されました。第50番目のRCの設立を見たのであります。

\* \* \*

かくして、更にロータリーに、光輝ある画龍点睛の役割りを果たしたのが、次のようなロータリーの充実、躍進であります。それは、ロータリーが誕生してちょうど10年の1915年、11カ条から成る“ロータリーの倫理訓”が決議されたことでもあります。その全条、いずれもロータリー精神、ロータリーの神髄を訴える金科玉条であって、ロータリー今日の大発展、充実への血となり、肉となり不動の礎となった大指標であります。その全文を、ここにご披露することを省略して、特に私が感銘を深くしたのは、その第2条に、「わが身を修め（修練です）、わが能率を向上し、わが奉仕を拡大すべきこと」。「そうすることによって、“最も良く奉仕するもの、最も多く報いられる”という、ロータリーの基本原則に対して忠実なることを立証すべきこと」。これで御座います。

以来、これが、ロータリーの大支柱となり、ロータリー永遠不滅の大原則となっているのであります。ロータリアンの誰れもが、入会の最初に学ぶ、ロータリーの二大標語の、それであります。

「Service above Self」＝「超我の奉仕」また「奉仕第一、自己第二」とも訳されています。

それと相對するのが、「Heprofits most who Serves best」＝「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」であります。そして、その第三条には、「われらは、実業人であり、成功の野心を抱いていることを認める。が、同時に、道徳を重んずる人間であり、最高の正義と、道義に基づかざる成功は、これを欲するものではないことを自覚すべきこと」とあります。かくして崇高なるロータリーの目的、ロータリアンの倫理の土台が確立いたしたのであります。

\* \* \*

さて、ロータリーが国際的規模となり、個々のクラブが六世帯になって参りましたので、“手続要覧”も必要となり、クラブ機構も複雑となって来ましたが、ロータリーの倫理、精神、眼目を二の段として、スタンドプレー的、クラブ運営や、“手続要覧”いぢりは、本末転倒と言わねばなりません。ロータリーは形でなく、「心」であり、「相手の身になっての思いやりの実践」であります。

近年、全世界を風靡した“エコノミック・アニマル”なる忌わしい侮辱的汚名は、ロータリアン実業人に当てはまらないものであらねばならないのであります。

当クラブのメンバーで、日本青年会議所のリーダー的存在の浅田豊久さんは、先日私に、「1980年代の青年会議所は、“心と文化”の時代を志向している」と、言われました。さもありません、共感を禁じ得ませんでした。

